京都は世界の聖地 —誰がどのように京都の原爆投下を阻止したか—

理事　岡崎甚幸

この５年間、京都の景観問題にかかわることが多い。市街地の景観を形成していた町家は２万８千軒に減っている。そして２千軒ずつが毎年取壊されている。米国が原爆や空襲を中止して残した歴史的景観を今、市民が壊しているという思いが強くなり、先月アメリカ滞在中に、米国政府の誰がどのような経緯で中止したのか友人達に調査を依頼していた。

Guntis Plesumsオレゴン大学名誉教授から届いた英文記事The Sparing of Kyotoと、歴史の森谷教授からお聞きして調べていた文藝春秋の記事が先日別々の経路で同時に届いた。二つの著者は奇しくも同一人物、元同志社大学のOtis Cary教授であった。同志社大学に聞くとすでに帰国されており高齢で面会は無理であった。戦時中は米軍兵士として日本近海を転戦し、戦後の昭和22年、新島襄の母校アーモスト大学から派遣されて以来ずっと同志社大学教授であった。その間、京都の原爆問題について精力的に調査された。「京都が無傷で残った理由を京都人として調べるうちに段々深入りしてしまった」と述懐されている。

教授によると京都を救ったのはStimson元陸軍長官であった。共和党の長老、民主党のルーズベルト政権に参加した二名の共和党員の一人。部下の陸軍次官McCloyは戦後アーモスト大学理事長で、来日したMcCloyからCary教授は、McCloyへの1945年春のStimson長官の質問について直接聞いた。「もし僕が京都を爆撃目標からはずすとセンチメンタルな老人と思うかね」と。McCloyは中止に賛成し、空軍長官Arnoldとちょっとした議論の後、彼に「マリアナ群島のB29基地の連中は爆撃したがっているが、僕がそれを禁じておいたから」と請け負ってもらった。Cary教授はStimson長官が1926年秋、都ホテルに二度宿泊していることを膨大な滞在者リストの中から発見した。Stimson長官は原爆に関する最高の暫定委員会を組織し、その長になった。目標地選定委員会は京都、広島、新潟、小倉を選んだが、Stimson長官は京都に反対し、目標地は自分が決めると主張。1945年５月原爆投下反対の初めての命令書「今朝、陸軍長官と参謀総長とはわれわれの選んだ目標地、特に京都を承認されなかったことをArnold大将に伝達されたし」が送付された。６月30日付けの「小倉、広島、新潟は投下予定の最初の原子爆弾に適している目標地として選ばれました。京都も選ばれましたが、京都については特に、陸軍長官が原爆のみならず、あらゆる形の爆撃の目標地から除外されました」というメモが残っている。原爆誕生はポツダムのトルーマン大統領に伝えられた。同行中のStimson長官はポツダムから「ヨノエランダマチ　カナラズ　ジョガイスル」と二度にわたって電報を送っている。Stimson長官の説得を大統領は「京都全体がアメリカに反対し、ソ連が得をする」として受け入れた。彼の絶えざる行動と強力な言葉で京都は救われた。1947年２月戦後の彼の回想録は「大統領の暖かい支持を得て、私は

示された目標地のリストの中から京都市を抹消した。京都は軍事的には相当重要な目標地であったが、そこは日本の旧都であり、日本の芸術と文化の聖地であった。われわれはこの町を救うべきことを決めた。・・」とある。

しかし広島と、小倉の身代わりとなった長崎は被爆した。京都が一人喜んでいるわけには行かない。しかしもし京都に原爆が投下されていたら金閣や銀閣、あちこちの庭のせせらぎ、町家のたたずまい、諸仏の姿も、今はもう何もないと思うと複雑な気持ちになる。

（京都大学名誉教授／武庫川女子大学教授）